



土を使わず、水だけで育てる 植物ブランド「WOOTANG」。 開発したのは中島大輔さんです。



▲水だけで育てる観葉植物(シェフレラ)
植物(水栽培用)、器(ガラス製)、
ふた(木製)のセット価格
Sサイズ ¥4,400 Mサイズ ¥6,600

絵と文
ふかさわ人



どこの国でも大都市が膨張し、住居や社会にストレスを感じるようになる。人々は園芸に憩いを求めるようになる。庭がない、もしくは小さな庭しかもてない都市住民にとって、生活空間に緑の潤いを与えてくれるのが「鉢植え」である。

鉢植えの歴史は、約2500年前の古代ギリシアまで遡ることができる。鉢植えの発明によって「植物を移動」させることができるようになった。地植えでは育たない寒さに弱い植物を冬季に温室に運びこむなどして育てられるようになったのである。イギリスでは産業革命期に園芸が大ブームとなった。イギリスは自生種が約200種しかない不毛の地だったが、プラントハンターが世界中から外来種の苗を「鉢植え」で運び込み、世界一のガーデニング大国になったのだ。

日本では江戸時代に朝顔や盆栽などの「鉢植え」が流行し、高値で取引

されていた。ブームを陰で支えていたのが旗本などの武家のご隠居で、趣味と美益を兼ねて「鉢植え作り」に励んでいたそう。ちなみに、当時の江戸の人口は100万人を越え、世界一の園芸都市だった。

「鉢植え」は、人が世話をしなければ育たない「管理された小さな自然」である。鉢植えが周囲の人たちの心を癒し、幸福感を与えてくれるのは、それが「生きていく自然」だからなのだ。反対に、枯れて放置された鉢植えは「死」「没落」「人生の儚さ」をイメージさせ、そこにあるだけで人の心を落ち込ませるネガティブな力がある。

植物アーティストの中島大輔さんは、毎日、世話をしなくても枯れない「鉢植え」を試行錯誤してきた。辿り着いたのが野菜の水耕栽培にヒントを得た「水だけで育てる観葉植物」と思いついてきた人に朗報である。

WOOTANG
info@wootang.jp
https://wootang.jp



仏像盆栽

植物アーティストの中島大輔さんを取材するのは2回目である。前回は2017年、木の根っこが「仏頭」を包み込んでいる神秘的で崇高な「仏像盆栽」を取り上げた。

当時、中島さんは盆栽をもっと身近に、もっと生活の中にもという思いを込めた「東京盆栽生活空間」という会社を設立したばかりであった。素人には敷居が高そうにみえる盆栽だが、中島大輔さん曰く、「盆栽を育てるのは簡単。毎日、外に出して太陽の光を浴びせ、毎日、1回は水をあげれば、めったなことでは枯れません」とのこと。



中島大輔さん

実験を重ね、水だけで育つ植物を開発

しかし、忙しい現代人には簡単な作業でも、日々実行し続けるのは意外と難しい。盆栽の世話のために旅行にも出張にも行けなくなってしまう。ペットホテルはあるが、盆栽を預けるホテルはないのだから、緑をインテリアに取り入れたいが、「水やりの手間が面倒」「虫がつくのが嫌」という声が多いことから、中島さんは「野菜の水耕栽培」をヒントに、毎日水をあげなくても元気に育つ「盆栽の水耕栽培」の実験を始めた。しかし、盆栽の水耕栽培であっても毎日、陽光を当てるために屋外に出さなければいけない。そこで、もっと手のかからない観葉植物に切り替えて実験を始めたのが2018年頃、約100種類の観葉植物を家の中の「陽の当たる窓際」「ほんのり陽が当たる場所」「あんまり陽が当たらない場所」の3か所に置いて、1〜2年の間、春夏秋冬を通じて実験を続けた。その結果、水だけでも枯れにくい20種類の観葉植物を選別。かくして「水だけで育てる小さな森」をテーマにした植物ブランド「WOOTANG(ウータン)」が誕生した。

「普段、見ることのない植物の根を透明でシンプルな器の中で見てもらうことで、植物がもつそれぞれの知られざる個性を発見してほしい」というのが中島さんからのセールストークだ。

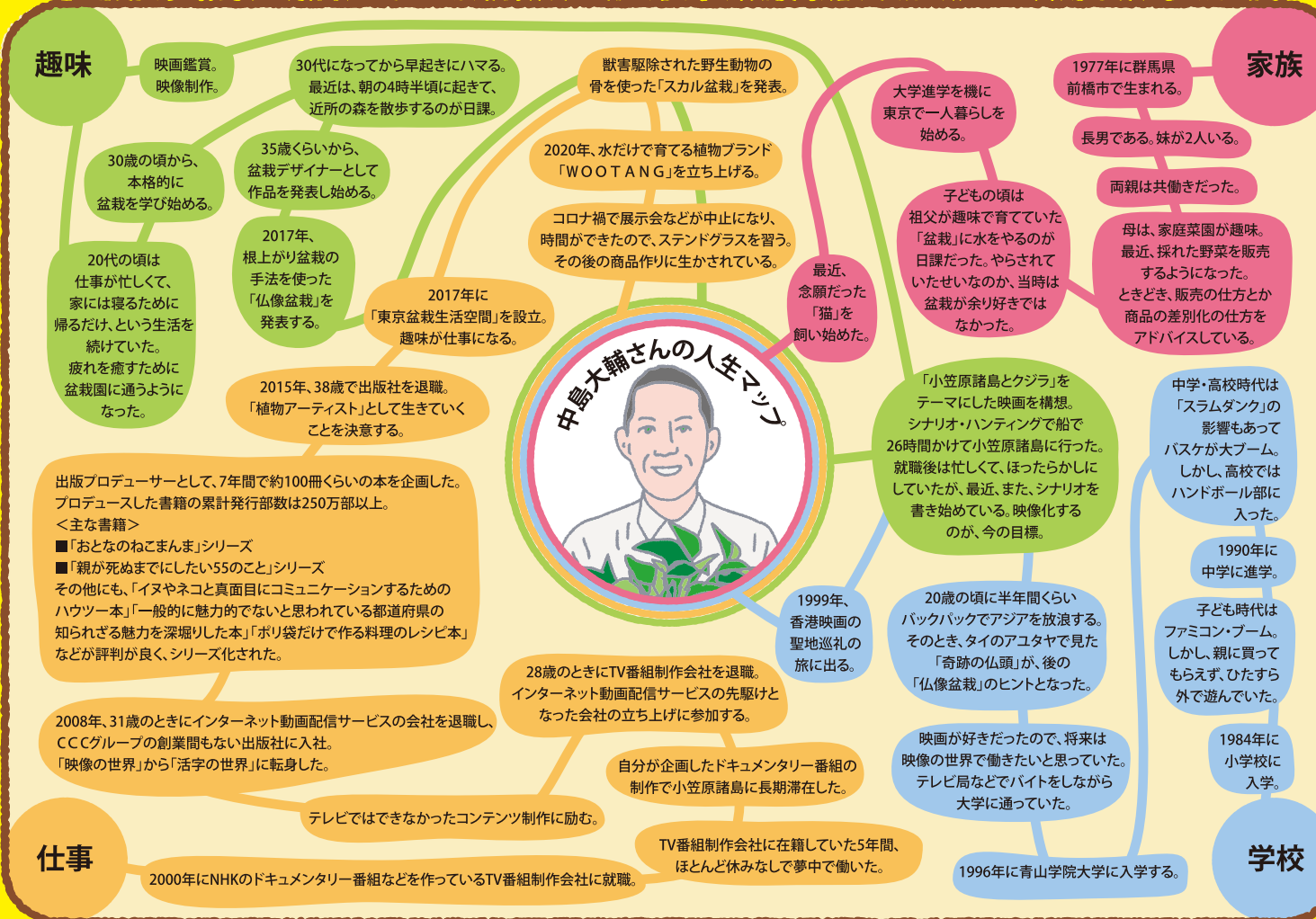
現代日本の住居は窓が大きく、室内の壁が白くて、照明も明るすぎるほどに明るいのが主流である。そんな明るい室内空間には、陶器の植木鉢ではなく、ガラスの植木鉢の方がデザイン的にも相性がいい。観葉植物の水耕栽培は「21世紀のデファクト・スタンダード」になるかもしれない。

水だけで育てる植物ブランド「WOOTANG」ウータンの「水だけで育てるシリーズ」は、基本的に窓がある部屋なら元気に育つ植物を選んでいる。トイレなどの窓が全くない場所は避けてほしいとのこと。

「水が減ったら足す」「水が汚れたら取り換える」だけでいいんだヨ。



- 水だけで育てる観葉植物 人気の高い観葉植物が20種類あり。基本的に「植物と器(ガラス製とふた(木製))」のセットでの販売となるが、植物のみ購入もできること。
- 水だけで育てるサボテン 土に植えたサボテンを枯らす原因は、水のやりすぎによる根腐れが多いとか。しかし、水耕栽培のサボテンは根が水に浸っているのに、なぜか根腐れしない。不思議である。
- 水だけで育てるマイクログラム 水を吸い上げる石に植えられた小さな蘭。暖かい季節になると花が咲く。
- 予測がつかないのが、蘭の魅力。マニアが多い植物である。
- オリジナル植物 VASE 天然石や流木にガラスを吹き付けて作られている。植物は付属してないが、「購入時には器に合う植物をご相談ください」とのこと。
- アポカド VASE アポカドの種を置いて育てる専用の器。種はスパーなどで買ったアポカドの種を使用しても問題ないそう。



編集者時代に培った成功の秘訣

植物アーティストの中島大輔さんは、学生時代は香港映画にハマっていた。好きになると、「この人のめり込むタイプで、今という「聖地巡礼」の先駆けのようなこともしていたとか。特に好きなのがウォン・カーウアイ監督の作品で「恋する惑星」の舞台となった雑居ビル「重慶大廈」にも一人旅で泊まったことがあるそう。だ、ちょっと香港返還の直後で、まだ、ヤバイ雰囲気が残っていたとのこと。すごく危険だったのではないかと考えたが、本人曰く「恐怖心よりも好奇心が勝るタイプ」だそうである。大学卒業後は、映画を撮りたかったが就職の募集がなく、NHKのドキュメンタリーなどを制作している番組制作会社に就職。5年間働いたが、その間、ほとんど休日はないという。めちゃくちゃ忙しかったが、ものを作り上げる楽しさを教えてもらったとのこと。その後、動画配信サービスの立ち上げに参加。3年ほど働いた後、CCCグループの創業間もない出版社に入社。新しい動きがあると、やはり好奇心が勝り、その動きに積極的に乗っていくタイプなのである。

出版社には7年間在籍し、1000冊ほど本を企画・プロデュースした。数多くの仕事をこなし、成功と失敗を繰り返していくうちに、中島さんは中島さんなりの成功の秘訣を会得していったようだ。

その秘訣とは？「時代のニーズを汲み取りつつ、余り人がやらないような変な方向から企画を考え、それをおさげけにしないで真面目に制作した本ほどヒットした感覚があります」とのこと。確かに、「仏像盆栽」「スカル盆栽」「観葉植物の水耕栽培」などは、他の人がやらないようなことを、時間をかけて丁寧に取り組んでいくことで、多くの人が価値を認める商品となっている。「見、奇をてらっているように見えて、根底で時代の気分やニーズとつながっているから、購入者がリピーターとなって繰り返し商品を購入してくれるのである。

「世の中のニーズを読み、植物の新しい楽しみ方を模索して、商品化する」という中島さんの仕事は、実は、江戸時代の園芸家が行っていたことに似ている。江戸時代に「奇品」と呼ばれる変わった形や色をした「万年青（おもこ）」「朝顔」などの鉢植えが珍重され、身分制度を越えて流通していた。いつの時代でも、丁寧に作られた新奇なものを同好の士は見逃さない。見ている人は、見ているのである。

火災に要注意!

年間数十件も起きているから、他人事じゃないヨ。太陽の高度が低い夕方や冬におきやすいんだって。直射日光が当たらないようにレースのカーテンをしたり、ガラスの器にカットングシートなどで模様を付けたりしてもいいよネ。

虫メガネでアリコを焼いちゃうのと同じ原理よネ。

窓辺に置いた金魚鉢やペットボトルに太陽光が当たって屈折し、一点に集まって火事が起こることがあるんだヨ。

まあ、なんて素敵な窓辺なの！ 真似しちゃお。

ちょっと待った!!